【生徒の学びを支える配慮】

生徒の学びを支えるために大切なことは、生徒に必要な支援・配慮を年度当初に全職員がしっかりと理解することです。しかし、高校入学には受検があり、合格が決まる前に中学校から情報が伝わることは稀です。また、確認しても個人情報の問題もあり、発達障害などの話は出てこないのが実情です。学習についていけない、授業に取り組まない、提出物を出さない等、生徒の困りに気付いたら、ケース会議を開いて生徒の情報を集約し、必要な支援・配慮について考え、職員で共有しましょう。

学びを支えるための生徒理解

生徒の中には次のような特性のある生徒もいます。　　※診断名はDSM-Ⅴに準拠

自閉スペクトラム症【ＡＳＤ：Autism Spectrum Disorder】

社会性、想像力、コミュニケーションの３つの特性があります。学習場面においては、社会性の欠如からマナーを守ることへの意識が向きにくい、想像力の乏しさから見通しを持って計画的に行動することが難しく提出物を出すことができない、コミュニケーションの困難さから応用が難しい、指示が伝わらない等の課題が生じることがあります。

学習症【ＬＤ：Learning Disorder】

全般的な知的発達の遅れはなく、学校生活では多くの生徒と同じように過ごすことができますが、読み書きや計算などのうち特定の能力を極端に苦手とし、学習面で努力を怠っていると誤解される場合があります。極端に苦手な能力があるため、レポートや課題を提出できない、ノートをとることやテストへの解答が間に合わない等の困りを示す生徒がいます。

知的能力障害【ＩＤ：Intellectual Disability】

全般的な知的発達に明らかな遅れがあり、学習面や日常生活の適応に困難を示します。勉強をしても学力が伸びにくく、各教科の基礎的な問題ができずに悩むことがあります。また、授業内容がわからず、勉強の方法を自分で調整することが難しいため、学習全般に苦手意識を抱きやすくなります。

注意欠如多動症【ＡＤＨＤ：Attention-deficit Hyperactive Disorder】

多動性、衝動性、不注意の特性があります。多動性や衝動性のために、授業への集中が難しいことから不用意な発言で授業を乱したり、不注意による忘れ物や課題提出ができない、ミスが直らない等の状況から学習意欲に乏しいと思われることがあります。

対応としては・・・

- 予告をする（その都度、予定や活動内容の変更を伝える）
- 見通しを伝える（年間予定を伝えたり、単元や授業内の到達点を示す）
- 量を調整する（課題を小分けする）
- ポジティブに評価する　　等

【参考図書】

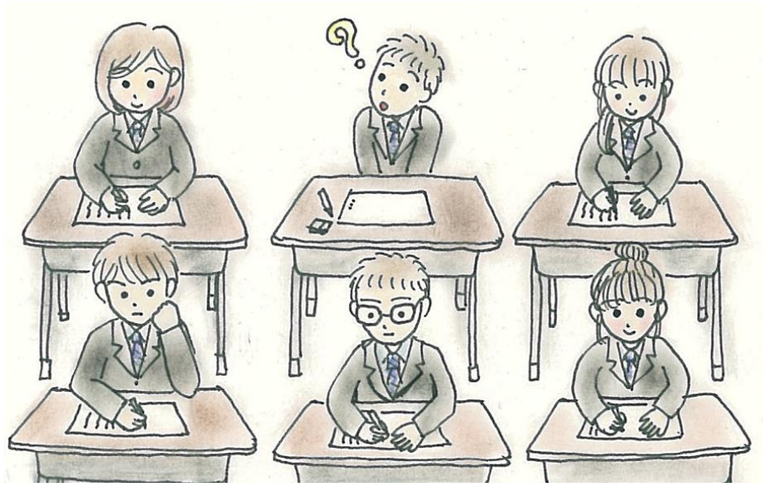
- 神奈川県立総合教育センター　明日から使える支援のヒント～教育のユニバーサルデザインをめざして～　2010
- 佐々木正美・梅永雄二 監修　高校生の発達障害　2010　講談社
- 野口康彦・櫻井しのぶ　子どもの心と臨床発達　2011　学陽書房

平成 26 年 11 月発行　問い合わせ先　神奈川県立総合教育センター教育相談部教育相談課

〒252－0813　藤沢市亀井野 2547－4　電話(0466)81-8521

教育相談センターの事例から見た

高校生への効果的な学習支援



皆さんの高校には、こんな生徒はいませんか。「提出物を出すよう催促しても、いっこうに提出物を出さない」「授業中落ち着きがなく、集中して授業に取り組まない」「ノートをまったくとろうとしない」

生徒の学習指導がスムーズに進まない、と学校からご相談を受けることがあります。今までのやり方や、他の生徒には通じるやり方が通用しない、どうしてなのか分からないという声が聞こえてきます。このような生徒は、もしかすると発達障害の特性があるのかもしれません。その生徒の特性に合わせた配慮があると、学習に取り組みやすくなります。

教育相談課では、高校生の相談事例から、生徒の特性に合わせた学習支援について検討しました。発達障害のある生徒が学習に取り組むために有効な支援は、すべての生徒にとって有効な支援です。皆さんの高校で、今までの方法ではうまくいかない生徒がいたら、このリーフレットをご活用ください。

神奈川県立総合教育センター

平成２６年１１月

こんな生徒はいませんか？

事例１　課題を出せず、評価につながらないＡさん

Ａ さんは人当たりがよいが、時折、その場にそぐわない発言をしてクラスメイトの反感を買うことがあった。テストでは平均位の点数を取っていたが、提出物を出さないことがあった。教科担当が注意すると「すみませんでした」と屈託なく詫びるが、そのまま提出しないことが多かった。提出物を出さないため成績は振るわなかったが、本人は気にする様子がなかった。必要な書類を保護者に見せなかったため、２年次の職場実習に参加することができなかった。

事例２　苦手な学習内容になると意欲をなくすＢさん

Ｂさんは、書字や作業などの苦手な学習内容になると「やっても意味がない」「眠いから寝てる」と意欲のない態度を見せ、教科担当が何度注意しても取り組まなかった。一方で、親しみやすい教科担当の指導には素直に従い、得意教科を友人に教えることもあった。家庭では保護者が課題やレポート作成を手助けしようとしたが、Ｂさんは「頼んでないのに」と反発し、ますますやる気をなくした。

事例３　授業中頻繁にトイレに行くＣさん

Ｃ さんは小中学校時代から個別支援を受けており、予定を把握して声掛けをする、座席を中央最前列にするなどの配慮を受けていた。Ｃ さんはいつも教科書などが詰まった重いリュックを持って登校した。授業中に教科担当の許可を取ってトイレに行くことが多く、時には同じ授業中に２回行くこともあった。担任が休み時間にトイレに行くよう注意しているが一向に改善されない。また、授業中、ぼーっと黒板を見つめることがしばしばあった。

事例４　スケジュールの調整や段取りを組み立てることが苦手なＤさん

Ｄ さんは指示に従って動くことはできるが、自発的に物事に取り組むことは苦手だった。友人と話をしているときに他の友人が会話に入ってくるとどうしてよいか分からず、困ることがあった。また、テスト直前になっても勉強に取り組むことができなかった。レポートは、提出する意図を理解できず出さないこともあった。家庭ではテスト勉強を始めるタイミングなど母親が声掛けを行っていた。

※「高校生ならできて当然」と思われることも、サポートがないと行うことが難しい生徒がいます。生徒の状況に合わせて合理的配慮を考えていく必要があります。

行動の裏側には・・・

・先の見通しが立てられない。
（具体的な指示がないと動くことが難しい）
・言語指示を理解することが難しい。
・場の雰囲気を読めない。

・言語能力と作業能力のアンバランス。
（言語能力に比べて作業能力が低い）

・黒板のどこを写せばよいのかわからない。
・学習能力が低い。
・授業内容が分からないので、いったんその場から離れたくなる。

・コミュニケーション能力が低く、会話はパターン化されやすい。
・時間の概念が弱く、自分でスケジュールを組むことが難しい。
・提出物を出すイメージがつかない。

特性に配慮した支援

□放課後、担任が個別に対応して、Ａさんが課題を提出できるようにした。
□三者面談のときに、次年度の取組について話し合いを持った。
□保護者のサインが必要な書類等については、担任から保護者に連絡し、提出期限を確認するとともに、声掛けを行った。
■モデルになる生徒を隣の席にした。
■年間行事表や月予定表を活用し、見通しを示した。

□放課後に教科担当や担任と１対１で課題やレポートを行う機会を作り、家庭で行う量を減らした。
■生徒同士の学び合いやグループワークを設け、Ｂ さんに役割を与えて意欲を高めた。
■書くことの苦手さに対して、PC・タブレットやデジタルカメラなど代替機器の活用を認めた。

□荷物について、学校に置いておくものと持ち歩くものを教育相談コーディネーターと仕分けした。
□定期的に教育相談コーディネーターと面接して、日頃のフィードバックを行い、意欲が落ちないよう励ました。
■授業中、作業する時間を増やした。
■座席を２列目か３列目にして、授業中にとるべき行動のモデルが見えるようにした。
■板書をわかりやすくして書字行動が起こせるようにした。

□学校から伝えられる課題や試験範囲、提出物等について、保護者と学校が連携した。内容については学校が、スケジュールについては保護者が管理・サポートを行った。
□テスト範囲と課題を集約し、リスト化したものを本人に渡した。
■模範となるような過去のレポート等を提示して、視覚的な支援を行った。

□教員や保護者による支援
■環境調整による支援